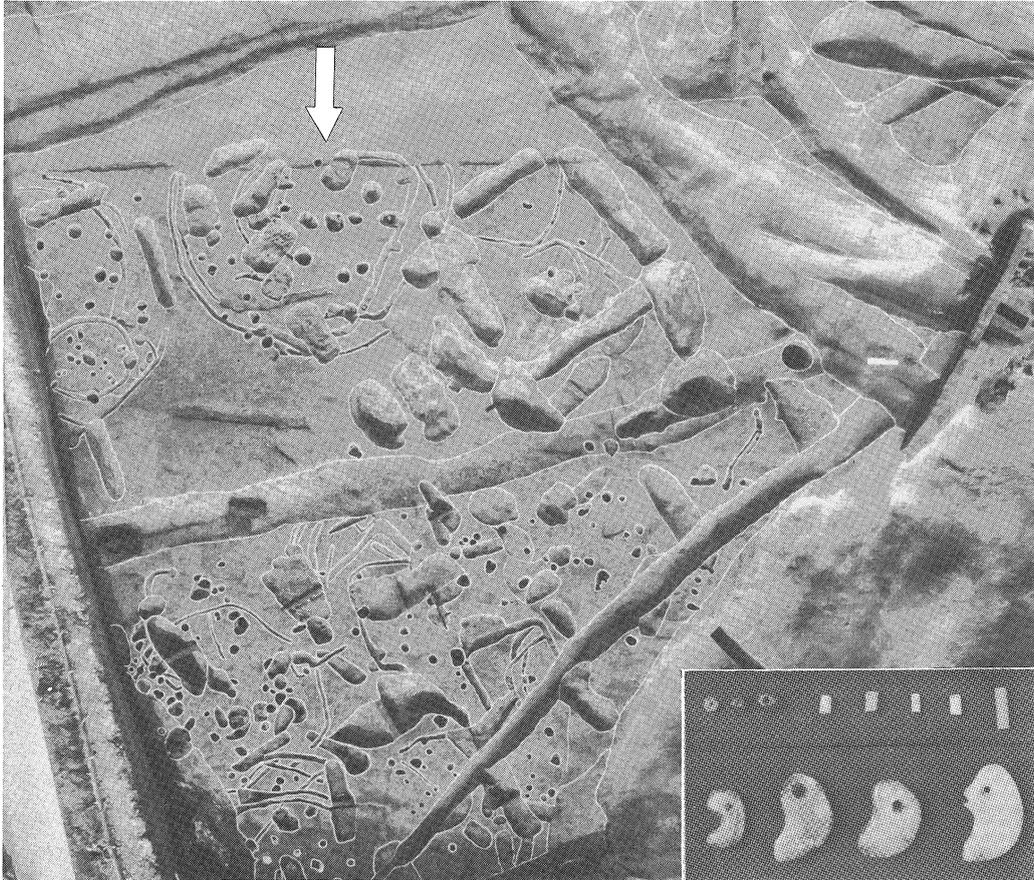


# 埋蔵文化財 愛知

No.3



## 朝日遺跡玉作り遺構

— 太平洋岸地域で初めて検出 —

西春日井郡清洲町大字朝日地内の朝日遺跡から弥生時代中期前葉（紀元前1世紀ごろ）の玉作り遺構を検出した。これは大型の円形住居（写真矢印、大きさ10m×9m）であり、ここからは多数の玉作り関係の遺物が集中して出土した。

現在判明している関係遺物としては、管玉（くだたま）製品、同未製品、原石剥片、玉作り工具などがある。また、この住居跡の東を南北に流れる旧河道から、勾玉（まがたま）5点が出土した。

今回検出された玉作り遺構は、太平洋岸地域では初めてであり、全国的に見ても弥生時代中期前葉というのは早い時期であり、注目される。また、この遺構の発見は、玉作りをした人々の社会的なあり方を解明してゆくうえで貴重なものといえよう。



## 遺物から見た城下町 その2

16世紀から17世紀初頭にかけて尾張統治の中心拠点であった清洲城下町は、五条川とその自然堤防をたくみに利用して形成された低地の遺跡であるため、多くの木製品が出土している。これらの木製品は、実に多岐にわたっており城下に集住し暮らした人々の生活を今に伝え、物質文化のみならず精神文化をも垣間見ることができる貴重な資料となっている。

### 木製品に見る城下町的生活

**食膳** 漆器椀（1～5）箸（6, 7）折敷（8）杓子（9, 10）、膳、湯桶注口などがある。漆椀は、器形により大まかに分類すればA：高台が高く、体部が真直ぐに立ち上り口縁が開かない（1, 3）、B：浅く、口縁が開き気味で高台が低い（4, 5）、C：浅く、体部が内湾し、口縁部が外反する（2）の3タイプになる。髹漆については、内外面ともに黒漆か朱漆、または外面黒漆、内面朱漆塗であり、内面黒漆、外面朱漆で塗られたものは見られない。

（2）は、内外面ともに朱漆塗でいわゆる「根来塗」と思われるものである。また、内外面に文様をあしらったものが多く黒漆面に朱漆で描かれる。文様には草花、樹木、鶴、亀、扇、家紋と思われる鶴丸、亀甲、木瓜、三巴など様々なものが描かれ、そのほとんどは手描きである。また、文字を記入した例もある。椀に比して皿の出土がごく少量であることも特徴である。箸は、破片も含めると膨大な量にのぼるが、すべて中太両細の両口箸で白木作りである。原則として断面四角形に作り角をさらに削り整え、長さは7～8寸（21～24cm）のものが多い。溝などからまとまって出土し消耗品の様相が強いと思われる。杓子には、一枚板を削った飯杓子とスプーン状に刳出した汁杓子の両者が見られる。

**容器** 曲物桶（11）、曲物柄杓（12）、結桶、つるべ桶、容器に附随する蓋板などがある。曲物は、檜などの針葉樹の薄片木を円筒形に曲げ、合わせ目を桜皮でとじ、側板とし、円形の底板を固定した容器であり、それに柄をつけ柄杓

としたものも見られる。檜物師（曲物師）と呼ばれる専門職人の手によると思われる曲物容器は、口径など一定の規格の下に製作された様子が窺われ、清洲城下町期においては概して小型品が多い。また当遺跡で検出される井戸側は、従来の曲物ではなく、すべて桶組みである。中世後半から結桶が普及したと言われるが、まさに清洲城下町の時期には径8寸（24cm）を越えるような大型容器は、いわゆる曲物ではなく結桶、結樽にその座を明け渡してきたと思われる。曲物である限り容量、強度、気密性、耐久性のいずれにおいても結桶に劣るためであるが、古代～中世において唯一の容器であった曲物桶は、軽量で持ち運びに便利という利点もあり、用途に応じて使用され消滅することはなかった。結桶は、井戸側としての大型品から底の浅い半切桶、たらいと想像されるものがあり、結桶の普及率の高さを示すものとなっている。

**服飾** 横櫛（17）下駄（18, 19）留め針、刀の鞘などが見られる。下駄は30点近く出土し連齒下駄と差齒下駄に分かれ、差齒下駄は、すべて露卯下駄である。連齒下駄は台の上面観により、小判形、長円形など若干の違いが認められるが、露卯下駄は曲線的で丸味を持つ長円形を呈するタイプのものに限られている。長さも大人用で言えば22cm前後に集中する。時期的な変化については、明らかではないが、16世紀前半期において露卯下駄が、16世紀後半期には連齒下駄の割合が多くなるようである。概してどの下駄もよく履きこまれ歯部の磨滅が著しく、台上に足指痕を残すものが多い。

**生産** ヘラ、紡織具としての糸巻、工具としての錐の柄が認められるのみで、特に農具がほとんど出土していない。約400万㎡に及ぶ城下町域のごく一部の調査において多くを語ることはできないが同時代の城下町のあり方を考える一つの課題となろう。

**遊、趣味** 「歩兵」と記された将棋の駒、先端を円錐形に削り軸棒を持たない独楽（14）、

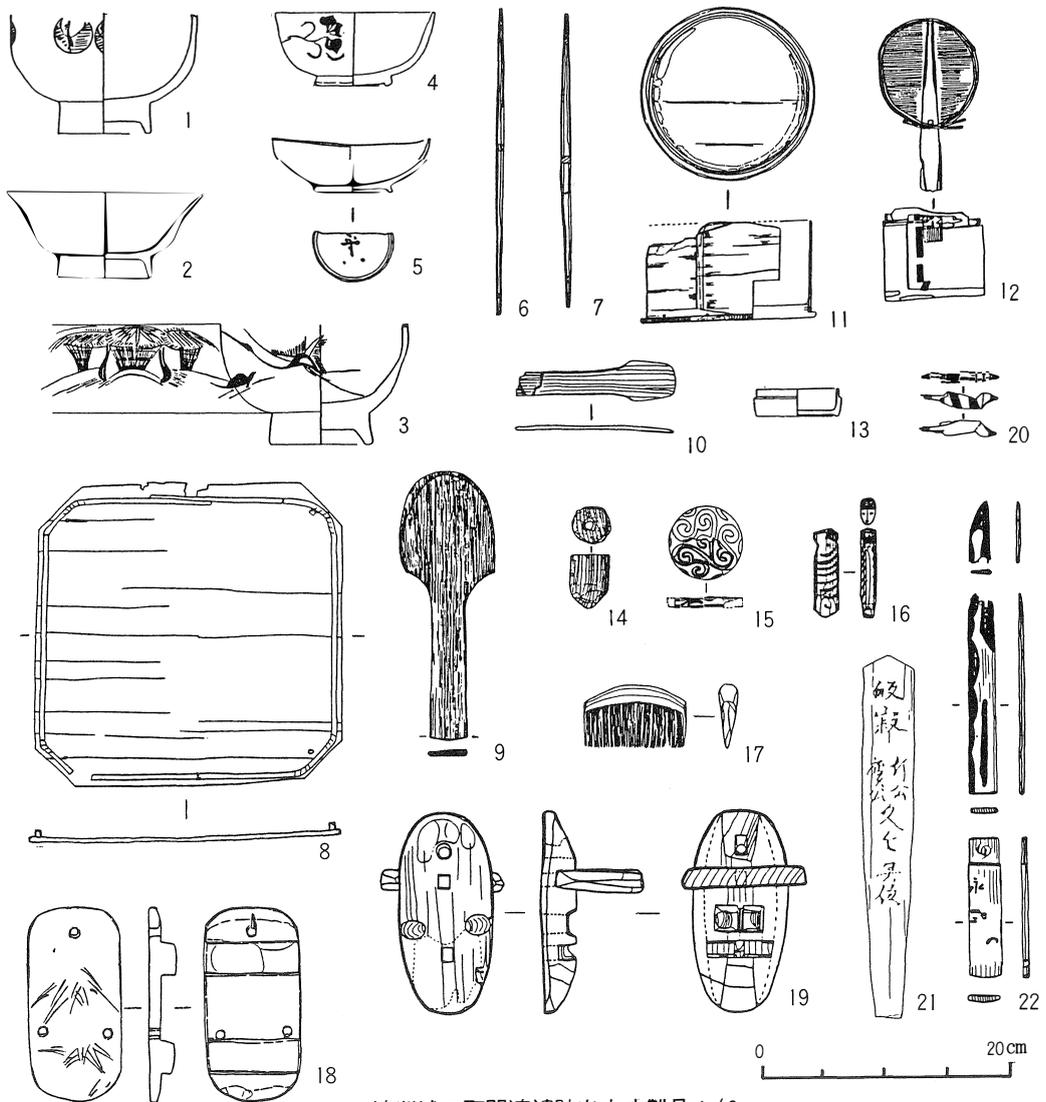
羽根つきの玉，彫漆屈輪文香合（15）顔と尾部を朱塗し墨で縞模様を描いた猿形（16），鳥を飼うさしこ，などがあり人々の精神的なゆとりをうかがわせる。

信仰 仏典等を筆写した柿経，慶長3年（1598）紀年銘のある板卒塔婆，数珠玉などがあり篤い信仰心を思わせる。また，鳥形（20）刀形（22）槍形，棒状人形，種々の呪符木簡（21）等呪術的資料も多い。

これらの出土木製品は，全体的に丁寧なつくりのものが多く，製作に当たり加工を容易にせしめた道具（金属製品）の存在を窺わせる。出

土遺物や加工痕からの推定でも，<sup>だいかんなのこぎり</sup>台鉋，鋸，錐，<sup>のみせん</sup>鑿，銚などの使用が認められ，製品ごとに特殊な工具が使用されていたことは想像にかたくない。また城下町には「鍛冶屋」「桶屋」「大工」などの町名が残り城下に集住した職人の存在を裏付け，出土遺物の多くは城下で製作された可能性もある。今後，出土木製品は，編年，産地の確定，流通経路，製作技法などの課題を明らかにすることにより，城下町に暮らした人々の生活の様子のみならず城下町期における社会構造までも物語ってくれるものと思われる。

（梅村 清春）



清洲城下町関連遺跡出土木製品 1/6

市町村だより

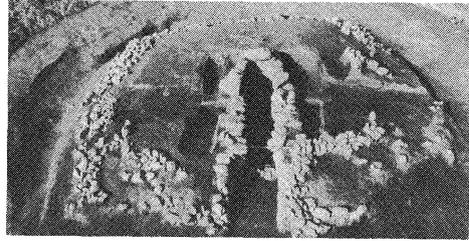
## 馬乗古墳群

蒲郡市教育委員会

馬乗古墳群は、蒲郡市域の西端、額田郡幸田町にまたがる海拔約60mの丘陵地に位置する。調査は短期大学建設工事に伴う緊急発掘調査で、10月1日から11月10日まで行われた。当初、古墳3基と推定されていたが、調査の結果、2号墳は古墳でないことが判明した。

1号墳には、墳丘はなく、長軸2.5m、短軸1.4mの長楕円形に列石（1～2段積み）で囲まれた竪穴状石室が検出された。床石は、三重に敷かれ、最下部（第3敷石の下）は厚さ3～4cmの砂敷きである。この竪穴状石室からの出土遺物はないが、周辺からは7～8世紀の須恵器・土師器等が出土した。おそらく終末期の墳墓と推定されるが、三重敷きの敷石は判然とせず、今後の検討課題である。

3号墳は、丘陵の南端部、1号墳から南方へ約100mのところにある。胴張りの横穴式石室



で、玄室・羨道の長さは6.4m、最大幅1.8mである。墳丘裾には外護列石を巡らせ、さらにその外側に周濠がある。列石の大部分は転石しているが、列石の残存良好な部分や転石状況から推定すると、外護列石の平面形は少々弓張り状になるが、約15m四方の方形であった可能性が高い。出土遺物は、須恵器・大刀・馬具・金銅製空玉（径2.6cm）・銀環等である。とくに、金銅製空玉の出土は県下で初めてである。この古墳の築造年代は、7世紀初め頃と推定される。

馬乗3号墳は、昭和61年3月までに、蒲郡市郷土資料館西隣に復元移築されることに決まった。

（郷土資料館主事 小笠原 久和）

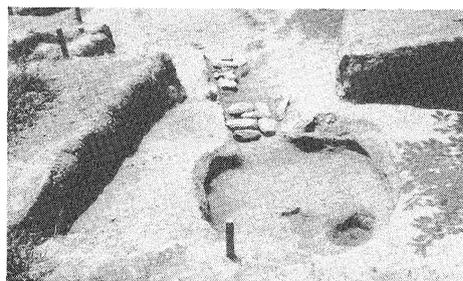
## 狩山戸遺跡

小牧市教育委員会

狩山戸遺跡は、篠岡古窯跡群の存する篠岡丘陵の東南部に古窯跡3基とともに検出された製鉄遺構である。桃花台沿線開発事業造成工事によって古窯跡9基が影響を受けることとなり、昭和59年度から調査を開始していたが、昭和60年7月に調査中に新発見された。

遺跡は、10世紀後半から11世紀後半にかけて相次いで築かれた篠岡17・102・103号窯から約10m離れたほぼ同一標高の丘陵斜面に斜行して築かれている。炉跡等の上部構造は遺存せず、地山に掘り込まれた円形土坑・溝・長楕円形土坑が検出された。

円形土坑は防湿施設と推定され、炉跡は本来はこの土坑上に築かれたものと考えられ、規模は直径2.3m、深さ0.5mを計測した。円形土坑から斜面斜め下方へ幅0.7m、長さ3mの溝



が掘られ、長さ4m、幅2mの長楕円形土坑へと続いていた。溝の底には径30cm程の川原石が敷かれ、この石上及び長楕円形土坑内に多量のスラグが堆積していた。また、溝の側壁はよく焼けており、炉から排出されたスラグを流すための施設と考えられる。

築造時期は、長楕円形土坑内でスラグとともに灰釉陶器片が一片出土していること、古窯跡群との位置関係から同一集団によって連続して操業した可能性が高いことから、平安時代後期のものと推定される。

（社会教育課主事 中嶋 隆）

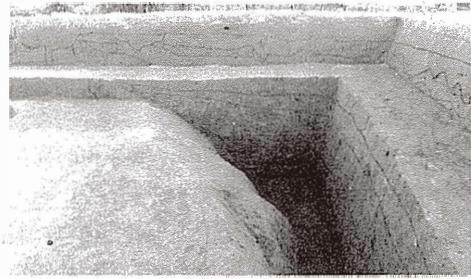
## 下津城跡

稲沢市教育委員会

おりづ  
下津の地は、鎌倉街道の宿場町として栄え、南北朝時代には定期市が開設されたことが文献に見られる。城の起源は不明であるが、鎌倉時代から守護所があった可能性がある。確実なのは、斯波氏が守護に着任した応永7年(1400)以降で、守護代の織田氏が居城していた。応仁の乱の際には、斯波氏の同族争いに巻き込まれ、文明8年(1476)、城が焼かれ、廃城となった。しかし、廃城後も、1550年頃に太田清蔵なる武士が居城したという記録がある。

城跡は、稲沢市下津高戸町・下津蛇池町・下津住吉町に位置し、木曾川の支流青木川右岸の自然堤防上に立地する。土地改良以前の地割図によると、北から本丸・二の丸・三の丸が並ぶ連郭式の城と推定される。

昭和54～56年度の県道拡幅工事に伴う緊急発掘で、堀跡・土塁跡・井戸跡等が検出され、木



簡・漆器・中近世陶磁器・石製品・金属製品等が大量に出土した。

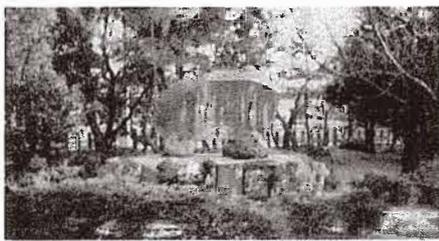
昭和59年度から4か年計画で国庫・県費補助事業として調査を実施している。

今年度は、8～10月に2か所を発掘し、推定本丸の北西隅においては、堀の埋土を確認できたものの、明確な堀の肩を検出することができなかった。推定本丸西部においては、建物跡等本丸内の遺構は検出されず、旧地割からの推定よりも東寄りに本丸西端となる堀跡の肩が検出された。出土遺物の量は、これまでの調査で最も少ない。

(社会教育課主事 北條献示)

史跡散歩 No 2

## 本刈谷貝塚



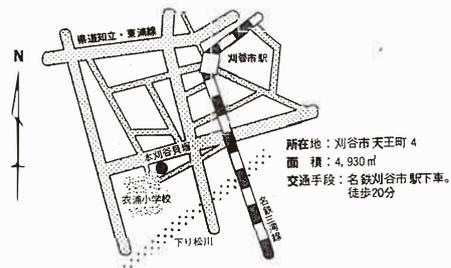
もとかりや

本刈谷貝塚は、刈谷市天王町の本刈谷神社境内に所在する縄文時代晩期の遺跡である。現在標高5～6mの洪積台地の周辺部に立地しているが、縄文時代には衣浦湾が貝塚のすぐ北側まで入り込んでいたと推定される。

本貝塚を構成する貝類は、ハイガイなどの海水産が主であり、貝層の厚さは約20cmである。ここから、土器・石器・骨角器等多種多

様な遺物が出土している。土器の主流をなすものは、肥厚させて作られた口縁部に半截竹管系文様を施した縁帯文土器であり、本刈谷式土器といわれている。骨角器では、尖頭器・弓筈・へら・牙製勾玉などが出土しているが、中でも弓筈は鹿角製品で彫刻や丹彩が施されていて、原始芸術研究上の重要な資料である。また、同じ貝層からは人骨も10体前後出土している。埋葬法は屈葬であるが、洗骨葬の特殊な事例である盤状集積もみられる。

(昭和42年 県指定史跡)



遺跡紹介

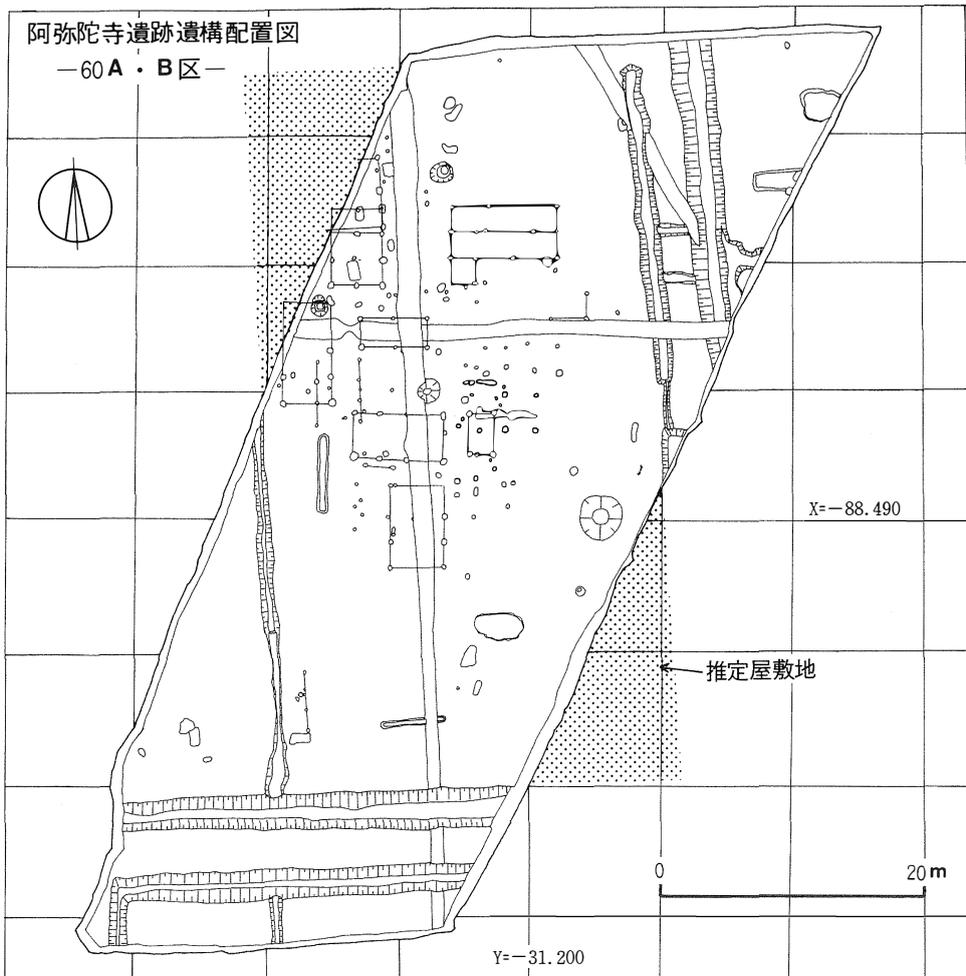
### 阿弥陀寺遺跡

阿弥陀寺遺跡は、尾張平野の一角、海部郡菟目寺町大字石作の字「阿弥陀寺」地内を中心とする一帯に展開する弥生時代と中世との複合集落遺跡である。昭和56年度から名古屋環状2号線建設に伴う事前調査として継年で発掘調査を行っている。本年度の60A・B区において、従来県下であまり調査例を見ない室町時代の「屋敷地」が良好な状態で検出されたのでここに紹介したい。

屋敷地は、東・南・西側を溝により画された東西約30m、南北約55mの方格のもので、その内に掘立柱建物8棟以上、井戸4基、柵列・

土壇等がみられる。屋敷地を画する溝は、西側のものが小規模なのに比し、東・南側は堅固であり、南北・東西に二条の溝が各々平行に走っている。それぞれの溝間の高まりは「道」と考えられる。掘立柱建物は、いずれも棟軸を東西ないし南北にとり、そのほとんどの柱穴内には「礎板」が遺存していた。また、建物は、一部重複がみられ二回以上の建て替えが想定される。井戸は、大小二基ずつみられ、一部建物との重複がみられる。個々の遺構の時期区分については、なお検討を要すが、総じて14・15世紀代に比定される。以上、建物配置等の残された問題も多いが、尾張平野部における当該期の屋敷地の一様相について明らかにし得たものと考え。

(浅井 和宏)



## 松ノ木（廻間）遺跡

……大規模集落遺構を検出中……

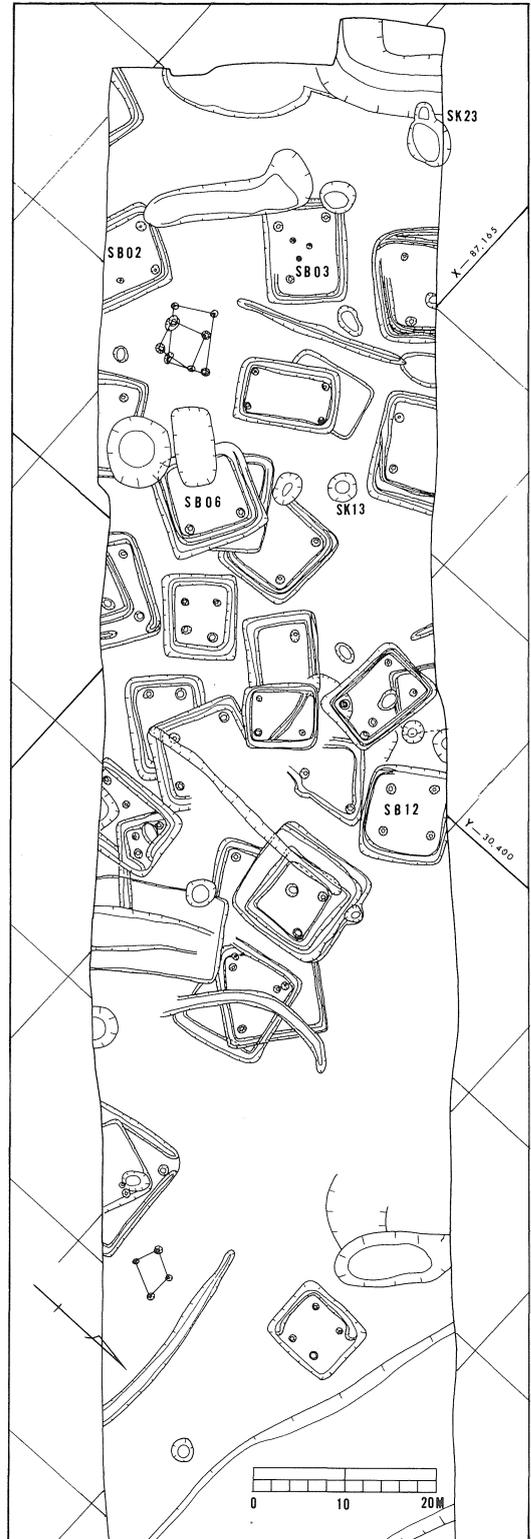
松ノ木遺跡は田中稔「愛知県西春日井郡清州町松ノ木遺跡」（『古代学研究』第14号 1956）で紹介されたのが最初である。昭和29年の夏、紡績工場建設に際して、土器が採取され、その分析の結果、弥生時代中期の遺跡として認識されるに至ったのである。

今回紹介するのは、この松ノ木遺跡の南端に属すると推定された地区の発掘調査についてである。発掘調査は昭和60年9月から当センターによって実施されていて、その調査結果に基づけば、本地区においては、田中氏の報告にあるような弥生時代中期の遺物は一切検出されず、弥生時代終末から古墳時代前期にかけて（いわゆる欠山式～元屋敷式）の遺構・遺物群を中心として、さらに奈良・平安時代から中世を通じて近世に至るまでの複合遺跡であることが判明した。また本地区は、先に前方後方形周溝墓を始めとする周溝墓群が発見された土田遺跡60A・B区の東側に接して位置し、同一の微高地上に展開しているのである。このように遺構・遺物の性格から言っても、遺跡立地の点から言っても、本地区を松ノ木遺跡の一角として理解することは不適當であり、土田遺跡60A・B区を含め、字名に基づくはさま廻間遺跡として別呼称した方が適當であろう。

古墳時代前期の主な遺構としては、東北端より周溝墓群の一角及び隅丸方形四本柱の竪穴住居跡群と、同時期以前から少しずつ方向を変化させながら中世に至るまで流れていた旧河道の存在を確認した。竪穴住居跡は、長方形もしくは方形プランで、A・C区では34棟検出した。B・D区については現在調査中であるが、A・C区と同様又はそれ以上の住居跡が存在するものと思われ、標高 1.7m 前後の低湿地に展開した古墳時代前期の集落として他に類例を見ない大規模なものである。

また、遺物等については整理中のため詳細は不明であるが、4時期に大別できそうである。

（長島 広）



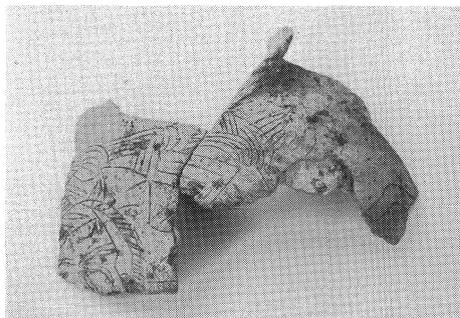
土田遺跡より出土

線刻文壺形土器

愛知県西春日井郡清洲町廻間地内に所在する土田・廻間遺跡の60B区から線刻文壺形土器が出土し、古代人の祭りを理解するうえで貴重な資料として注目されている。

この線刻文壺形土器は、古墳時代前期の方形周溝墓の北側溝から出土し、口径16cm、現存器高13.4cmを測る。体部外面には、丹が塗ってあったらしく、一部にその痕跡が認められる。

文様は、体部上半に篋状工具によって焼成前に刻まれており、人面かと思われる円形部と周縁部に大別でき、弧（半円形）と直線の複雑な組み合わせで構成されている。その意匠はきわめて抽象的であり、人間の思考を抽象化し描き出そうとした古代人の宗教的表現とも考えられる。また、出土状況から言えば、線刻文土器は



他の共伴土器とともに、祭りの専用の道具として作られ、使用され、廃棄されたものと思われる。その線刻表現を含め、当時の祭りの性格を理解するうえで何らかの手がかりとなるものであろう。それは、方形周溝墓への埋葬儀礼の一環として行われる首長権継承儀礼に伴う共飲共食に用いる重要な道具と考えることもできるのである。

(小澤 一弘)

センターニュース

調査録

朝日遺跡 (E・F・G区)

朝日式期の住居跡内から、多数の玉作り関係遺物が出土、玉作り跡と認定。弥生時代中期後半(貝田町式期)の方形周溝墓3基を確認。旧河道内から縄文式土器(後期前半)が出土。

松ノ木遺跡 (B・D区)

弥生時代末から古墳時代前期に至る竪穴住居跡群を検出。既に調査を終えたA・C区を合わせると60軒を越えるものと思われる。

土田遺跡 (B区)

古墳時代前期の方形周溝墓1基が検出され、周溝内から線刻文壺形土器が出土。

大淵遺跡 (A・H・F・K区)

弥生時代中期末(高蔵式期)の住居跡を約15軒検出、うち1軒は8m×8mの大型のもの。奈良時代の縦板組み隅柱止めの大型井戸を検出。

阿弥陀寺遺跡

幅2m余りの弥生時代の環濠の一部を検出。

来訪者

11/5・12 千葉県文化財センター 麻生正信氏 他2名

11/8 名瀬地区高等学校社会科教育研究会

11/12 堺市教育委員会 森村健一氏他1名

11/13 岩手県文化振興事業団 高橋与右衛門氏他1名

11/20 福井県埋蔵文化財センター 中司照世氏他5名

12/5 栃木県文化振興事業団 田代隆氏他2名

日誌

10/26 ~27 日本考古学協会の大会へ土田遺跡関係の資料をパネルで提出、紹介。

10/31 ~11/19 奈良国立文化財研究所主催の研修「予備調査課程」に池本正明主事が参加。

12/11 ~13 市町村埋蔵文化財担当職員研修会(基礎研修会)が行われた。参加者は19名であった。

埋蔵文化財愛知 No 3

発行 昭和61年1月  
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター  
〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号  
名駅パークビル9F  
TEL 052-586-3155  
印刷 東海プリント社